

手と手と手

岡山発 国際貢献

「私は四・四秒。でもアメリカ人の平均は九・七秒。日本人は四・三秒。恥ずかしいです」

今年二月中旬、高松市で開

かれた国際協力セミナーで、講師のゲイブ・フィリップス・クレス(三五)はうづむきながら話した。アフリカなどで国際協力活動を行うNPO法人・えひめグローバルネットワーク(松山市)のスタッフ。アメリカ人。四国在住歴四年。

参加者は、NGO(非政府組織)メンバーや教師のほか、記者を含めて二十人。それぞれ、自分の生活実態からほじきだされた数字を手に、苦笑するしかなかった。記者は四・八秒。七人は五秒を超えていた。エコシカル・フットプリントと呼ばれる。

人間が地球の自然を踏みつけた跡とでも表現するとイメ

不公平

ーシでできるだろうか。人間が一年間に消費する食糧や木材などの資源量を、その生産に必要な陸と海を合わせた面積で表す指標で、一九九〇年代にカナダで開発された。輸入するモノザンビークの人は平均

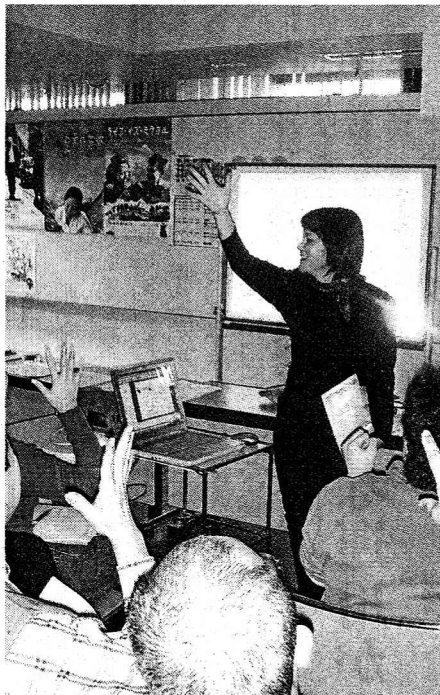
持続不可能

ゲイブの話は続く。

「私たちNPOが支援す

にカナダで開発された。輸入するモノザンビークの人は平均〇・六秒。(地球の生物生産力一人あたり一・八秒から自分のフットプリントを比較すると)地球〇・三秒の暮らしです。会場によって考案されている空気が少し重くなった。

未だ



竹内は、国際協力セミナーの参加者に「公平」という言葉の意味を問い掛けた＝2月、高松市

「日本人は地球二・四個分、アメリカ人は地球五・四個分」。ゲイブは淡々と説明するが、記者の頭の中では「不公平」という言葉が回り始めた。

セミナーで紹介されたデータは、欧州環境機関(EEA)のホームページに掲載されている最新版だ。世界の一人あたりの平均は二

・二秒で、これは地球の生物生産力を20%強超えている。つまり、地球環境と人間は、すでに持続不可能な関係にあるという。

「問われているのは教育の質」と、小栗有子(三三)は指摘する。日本では数少ない持続可能な開発のための教育(ESD)の専門家。〇三年から鹿児島大助教授を務める。

人間理解

「これで先進国の教育は最善を尽くしているといえるでしょうか」と小栗。「教育を問い直し、方向転換することがESDの目指すところです」

一つだけのみかんを二人の子どもに手渡すと、たいていの子どもが半分を試みる。房の数で分けるか、重さで分けるか、悩むという。

「本当の半分、本当の公平って何でしょう」。ゲイブに続き、講師に立ったえひめグローバルネットワーク代表の竹内よし子(四八)は、参加者に問い掛けた。

本当の公平を身に付け、国際的視野に立ち、次世代のことを考えながら行動できる人間を育てること。竹内はESDをこう語る。そのためには人間理解が欠かせない。

「しっかりと話し合って、本当におなかのすいている子にみかんを譲ることが本当の公平じゃないでしょうか」

求められる教育の転換

(敬称略)

ご意見をお寄せください。〒700-8734、山陽新聞「国際貢献取材班」。ファクス(086-245-5296)、メール(kokusai@sanyo.oni.co.jp)。